

2023年夏季 参加報告書

参加プログラム：CDC・ミュンヘン

参加時の学年：3年、学部：人文、学科：ヨーロッパ文化

私は、ヨーロッパ文化学科の必修科目で1年次からドイツ語を勉強してきたが、ほとんど話せないことに違和感を覚え、せっかく学んだからにはある程度話せるようになりたいと思い、このプログラムに参加した。



ホームステイについては、私自身高校生の頃アメリカに2週間ほどホームステイをした経験があるので、それ自体にはあまり不安はなかったが、単純に「ドイツ語が話せるか」というのが、ホームステイでの不安要素であった。しかし、ホストファミリーに初対面すると、流暢な英語で話されたため私も英語を話し、ここで無理にドイツ語を話さなくても良いという安心感があった。そのため、対面から2日間はほぼ英語での会話であった。しかし、その後これではドイツ語圏に来た意味がないと思い、多少言葉に詰まってもドイツ語で話せることはドイツ語では話そうとした。とは言え、最初のうちは、簡単な文章を話すのがやっとで多くは英語になってしまった。しかし、2週目、3週目

になるに連れ、だんだんとドイツ語が話せるようになってきた。これはCDCのドイツ語の授業があってこそその進歩だろうと思う。

CDCの授業では一般的な単語や文法の知識の学習に加え、それを盛り込んだちょっとした会話活動やすごろくなどのミニゲームが行われ、アウトプットにも比重が置かれていた。そのため、日本ではなかなかできない「使えるドイツ語」を学ぶことができた。授業の進行はドイツ語が基本であるものの、難しい説明や理解できないことなどは、英語で補足されたため、授業においていかれることもなかった。そして、そういった授業進行のおかげか、徐々にではあるがドイツ語がスツと耳に入って、頭を使わずとも理解できるようになっていった。

学校の休憩中に他国の学生と話すとときは、まだまだドイツ語が未熟な学生の集まりということもあり、英語が大半であった。英語でのコミュニケーションはドイツ語に比べ楽ではあるものの、英語にも各国の訛りがあり、多少の苦勞があった。しかし、徐々に訛りのクセを理解し会話がスムーズに進めるようになった。

こういった経験を通して、1か月という短い期間ながらも、特にスピーキング・リスニングの面でドイツ語の成長を感じることができた。当初はほとんど英語になっていたホストファミリーとの会話も週を追うごとにドイツ語の割合が増え、最後の4週目には言葉に詰まりながらではあるが、8割程度ドイツ語で話せるようになった。

また、ドイツ語のプログラムではあったが、特に学校の雑談では英語を使う機会が多かったため、幾らか英語力が向上したようにも感じる。また、さまざまな国の人と話すうちに異文化交流をすることができて、このプログラムに参加できた意義は非常に大きいと感じる。

今後は、ドイツ語の学習をさらに続けるとともに、世界に目を向け英語にも磨きをかけたいと思う。

